

山茶花

池松 孝子

山茶花というと思い出すのがあの童謡「たきび」だ。異聖歌作詞、渡辺茂作曲。1949年NHKの「うたのおばさん」で松田トシや安西愛子が歌い全国に広まった。今でも幼稚園、小学校で盛んに歌われている。その歌詞は懐かしい。最近、「たきび」は焼却温度が低いと有害物質が出るので、大気汚染、悪臭などで住民のクレームもあると聞く。また「しもやけ」など今の子供にあるのだろうか。

山茶花は常緑で枝もあまり広がらないので生垣としてよく見かける。冬の季語でもある。耐寒性のあるイメージから花言葉は「ひたむきな愛、困難に打ち勝つ」などだ。そして花首からポトンと落ちる椿と違い、花びらははらはらと一枚ずつ散っていく。それも来る日も来る日もである。

山茶花は寂しき花や見れば散る

池上 不二子

中国語で椿の類全般を「山茶」いい、その花を「山茶花」という。花も椿と似ているため、日本産の「さざんか」ととり違えたのではないかとの説がある。また「山茶花」の本来の読みである「さんさか」が訛ったともいわれ、「さんさか」が「さざんか」に変化していったとも考えられる。

このような音の変化を音位転換、あるいは音位転倒という。これは珍しくない現象で、転換された語形の方が今でも残っていることが多い。有名な例をあげるよう。1200年以上前、「あたらし」だったものが平安時代には「あたらしい」に変化し、そのまま1000年後の今もこれが続いている。

「したつづみ」(舌鼓)が「したづつみ」「あまきははら」(秋葉原)が「あきはばら」に。また、幼児、子供がよく間違える例もある。例えば「エレベーター」が「エベレーター」に、「おせんたく」が「おてんたく」に、「じゃがいも」が「がじゃいも」になったりする。さらに「シミュレーション」が「シユミレーション」になるなど外国語の例もある。また、北陸地方では、「生菓子」が「ナガマシ」になり、今では方言として定着しているという。